

装画の登場

～ヨゼフ・チャペックをとおして

多摩美術大学 教授

秋山孝ポスター美術館長岡 館長

秋山 孝

●装画の始まり

本の表紙やジャケットに、イラストレーションの魅力を用いた強いメッセージ性を持たせるようになったのは、いつごろなのだろうか。

本の用紙の素材は、はじめは粗雑なパピルスが用いられていたが、後に丈夫な羊皮紙が登場する。それにともない、必要となったのが、バインディング(装丁)の技術である。羊皮紙は、子羊・子牛の背中の革をなめして油分を抜き一枚の紙ができあがる。丈夫だが動物の背中の革のため、長く置いておくと丸まる習性がある。そのため、バインドと丈夫な表紙が求められた。その時代、本文の文字やイラストレーションは手書きで描いた一品製品であった。高価なもので豪華な家一軒分の価格があったという。印刷物が登場するまでの時期(14世紀ごろ)を揺籃期と呼んでいる。

東洋では、中国の蔡倫が紙を発明したと言われている。それは丈夫で長持ちする紙であった。しかしバインディングの方法は、紙を丸めた巻物(卷子本:かんすほん)と言われる原始的な形態であった。その後、経本とも呼ばれる折ることによる製本手法をとった。また、紙を綴じることによって冊子が生まれた。西洋と東洋の進化の仕方は異なるが、両者とも手で書く一冊本であった。

本は貴重な内容のもののため、大切に保存されることが必然的に求められた。もちろん製本された表紙は丈夫で長期間保存に耐えるものでなければならぬため、西洋では革での製本が一般化され大切にされた。1445年にゲーテンベルクの活版印刷機が登場するまでは、本はその家の財産であるため、表紙に紋章などを打ち、所有者が分かるようにした。本の価値は高く、貴族など社会的地位の高い人達しか持つ事ができなかった。その後印刷機が発明されると本の価格は下がり、一般大衆の手元に届くようになったが、初期のころはまだ高価なものであったことは間違いない。そのため、本の内容を守る装丁は、羊皮紙を使った時代と同じく丈夫さとともに品格や豪華さが重んじられた。

19世紀に入ると街のあちらこちらに書店が多く点在し、庶民の識字率も上がって文字を読むことができた。本は一般大衆にも広がり、貴族から民衆まで読書が娯楽のひとつになった。さらに本の価格は大量印刷、大量消費のもとで下がり、市場における競争原理が働き、一冊の本の単価をさらに下げなければならなくなった。販売競争の激化である。書店は、店先の前に台を置き本を積み上げ、現在のような販売手法をとるのが常識となった。

その結果、ただのエンブレムとタイトル文字だけでは本の識別ができなくなり、その差別化をはかるために登場した

のが、イラストレーション付きの表紙である。そこには本の内容をモチーフとしたイラストレーションが描かれ、文字によるタイトルに加え、ふたつのメッセージが発信され、強力な伝達力が生まれた。

●チャペック兄弟の登場

本の表紙にイラストレーションを用いた顕著なものにチェコのチャペック兄弟を挙げなければならないと考える。兄のヨゼフ・チャペック (Josef Čapek 1887–1945) と弟のカレル・チャペック (Karel Čapek 1890–1938) である。

兄ヨゼフは20歳から画家として活躍し、弟のカレルと共に舞台劇や短篇の物語(主に児童書)、批評文を執筆した。また、書籍の装丁、装画や本文の挿絵を数多く描いた。ナチスドイツの批判を行ったため、捕えられ強制収容所で亡くなった。

弟カレルは作家、劇作家、ジャーナリストで、国民的作家であった。『R.U.R.(ロボット)』と『山椒魚戦争』はSFの古典的傑作とされ、現在も評価が高い。兄ヨゼフと同様に正義感が強く、アドルフ・ヒトラーとナチズムを痛烈に批判したためゲシュタポに目を付けられたが、1939年3月15日ドイツがプラハを占領した前年に肺炎で亡くなった。

兄は主に本のデザイン、弟は文学者として共に書籍出版に関わる分野で人気を博したが、兄ヨゼフは現代のブックデザインの根本的な考え方を最初に試みた、重要な表現者といえるだろう。

ヨゼフはもともと、当時の最先端の芸術運動であったアバンギャルドの、チェコにおける指導的な人物に数えられている。「アバンギャルド」とは「前衛美術」「最先端の芸術家」といった意味をもっているが、このキーワードが彼の創作の姿勢をよく表している。つまり、彼は前衛的な考えを持ち、習慣化・一般化されたものに対するアンチテーゼのもとに創作をしている。

芸術運動の一環でパリに行った際、市民革命による格差社会の影響が残った社会情勢の中で、量産された質素な本を目にした。それは、産業革命による大量部数の生産方式で作られた本で、廉価版の画一的な表紙、単純で飾り気の無いたたずまいだった。そこに、過去の豪華で権威的なブックデザインとは異なった、前衛的な斬新性を感じ取った。

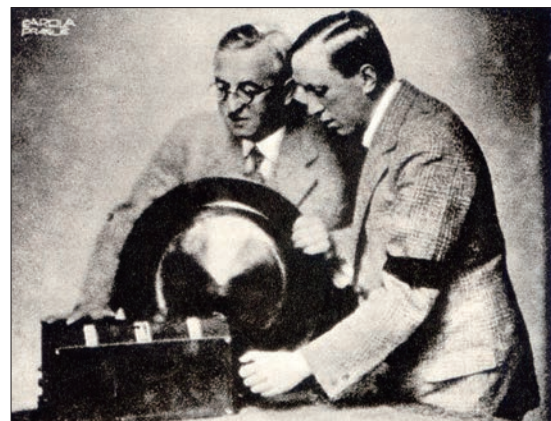
彼は自分のことを「アナキズム的傾向を持っている」ととらえ、「模範的に生成された印刷物に喜びを感じたことはなかった」と述べている。

彼が住んでいた魅力的な街プラハは、本の出版部数はパリなどと比較できないほど少部数であり、本の市場も非常

に小さく、しのぎを削っていた。しかし、そのような中でも本を売るためには、強く注意を引かせることが重要だと考えていた。有名でない題名の本などが出版されると、まったく無視されるのが現実であった。かつて表紙は上品な装飾模様を描いた豪華なイメージが重要だったが、新しい時代がやってきて大衆化が進むことにより、多くの人に注目させる広告のような強い訴求力を持った表紙が必要だと彼は実感した。

当時、パリで広告と言えばロートレックやミュシャに代表されるポスターによるシンプルで強いビジュアル表現が主流であった。その訴求力を本の表紙に持ち込むアイデアが必要であると考え、現代的な本であるためには表紙をポスターにしなければならないと言った。書店のウィンドウの中に、その効果を与えなければならないと考えた。

また、プラハの出版業界は少規模のため、できるだけ安上がりな印刷方法を必要としていた。そこで、彼は、出版社たちに大きな財政犠牲を払わずにすむ手作りの凸版リノニュームカットの導入を提案した。



カレル・チャペックとヨゼフ・チャペック



ヨゼフ・コプタ著

『人々と物たちの劇』1927年

リノニュームカットの表現による表紙のデザイン

●ブックジャケット

世界では「ブックカバー」と言うと本の表紙のことを指し、「ブックジャケット」というと「ブックカバー」のことを指す。日本では、そこでいつも会話の混乱を招く。つまり日本人は間違えて翻訳したのであろう。それが、そのまま和製英語となった。正しく言うと「表紙=ブックカバー」「和製英語のブックカバー」=「ブックジャケット」ということになる。英語圏では「ブックジャケット」を「ダストジャケット」や「ダストラッパー」と呼んだりする。その上、日本では書店のレジカウンターでサービスや包装を目的で購入した本を覆うラッピングも「ブックカバー」と呼ぶので、さらに混乱する。

なぜ本にブックジャケットを付けるのかというと、書店で売れなかった本が出版社に戻ってきた後、再度流通させるためには、本の汚れを取り去り、リニューアルする必要があるからである。汚れたブックジャケットを新しいブックジャケットに交換すれば、新品同様になる。つまり販売の効率アップをはかる目的がある。

さて、現在の一般的な本のデザイン依頼法に目を向けると、造本に関わる設計は大抵出版社の方で決めてくるケースが多い。例えば本文の紙、ページ数、サイズ、フォント、表紙の紙の価格など、造本の設計に関わる重要な部分は、出版社側で先に決定してしまっただ後で、デザイナーが、表紙まわりとブックジャケットのデザインだけを依頼されることが一般的になった。以前は図書設計に関わる全般をデザイナーに任されたが、コスト計算のシステムと低価格競争の結果、造本デザインの主導権が出版社となった。まれに少数の豪華本などはデザイナーに造本としての図書設計を任されることがある。

そう考えると、ヨゼフ・チャベックが予言した結果が現在のブックデザインの主流となったといえよう。ヨゼフは、本は大量生産、低価格でなければならないと考えた。それは、一般大衆の隅々まで本の持っている知識、教養や娯楽性を行き渡らせるための提案であった。

これから電子ブックなどの台頭によって、本自体の考え方の方向が、大きく変化することになるだろう。ただし印刷された本の魅力そのものは消え去るものではなく、機能と目的における住み分けが明確化されていくと考える。その結果、デザイナーやイラストレーターの需要供給の関係も変化してくるだろう。

いつの世も、文字の力と図像（イラストレーション）の力は普遍的な伝達力を持っている。それは、人類の歴史をみると明らかで、これまでもどんなに新しいメディアが登場

しようと、文字(言葉)と図像による伝達力が必要とされてきた。

そう考えると、本の仕事に携わるためには、本の仕事全体を熟知することが大切だ。さらに特化した独自の専門性を持ち得たデザイナー、イラストレーターがより求められ、今後のブックデザインに貢献する人材となりえるだろう。



文：Karel Čapek 絵：Josef Čapek 『VĚCI KOLEM NÁS』
Ceskoslovenský spivatel 1954年



文：Karel Čapek 絵：Josef Čapek 『devatero pohádek』
ALBATROS 1977年発行